

ウラナミアカシジミ *Japonica saepestriata saepestriata* (Hewitson, 1865)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 35 mm。翅の表裏とも地色は橙黄色、裏面には一面黒条がある。幼虫の食餌植物はクヌギ・コナラ、遠州ではおそらくアベマキ。卵で越冬。年1回6月上旬より発生し、7月まで見られる。クリの花を特に好みよく吸蜜に訪れる。

2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国に、国内では本州と北海道、四国の一部に分布する。県内では伊豆半島、標高およそ 100~700 m の富士山麓及び浜松市とその周辺から記録がある。

3. 生息環境

里山・低山地の若いクヌギ・アベマキ林に多く、コナラの林でも発生する。

4. 生息状況

2000年代初めまで富士市、富士宮市、沼津市などの低山地のクヌギ林を中心に記録があるが、その後クヌギ林の減少と共に個体数はかなり減少している。一方旧大仁町や伊東市ではクヌギ・アベマキ林が良い状態で維持され、安定して生息している。また、西部の記録はこれまでごくわずかであったが、調査の結果湖西市などには少ないながら確実に生息していることが判明した。

5. 減少の主要因と脅威

生息地が住宅地郊外や低山地であるため、宅地造成をはじめとする各種の開発 (23) の影響を大きく受けている。また、本種は若いクヌギ林に好んで発生するが、クヌギ・アベマキ林の伐採・更新が以前ほど行われなくなった (53) ことも要因の一つと考えられる。

6. 保護対策

特にこの種の保護のための対策はとられていない。里山のクヌギ林の保全・更新が望まれる。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

- 伊藤勝啓 (2015) ウラナミアカシジミを県西部2箇所を確認. 駿河の昆虫, (252): 6918
旬坂友和 (1961) 1960年天竜市熊地区における蝶類覚え書. 駿河の昆虫, (33): 861-866
諏訪哲夫・高橋真弓 (2007) 故小林國彦氏の蝶類標本(1). 駿河の昆虫, (219): 6081-6097
高橋真弓 (1967) 静岡県とその周辺のみドリシジミ類についての覚え書. 駿河の昆虫, (57): 1561-1608
高橋真弓 (2002) 2002年伊豆半島南部におけるウラナミアカシジミなどの記録. 駿河の昆虫, (200): 5605

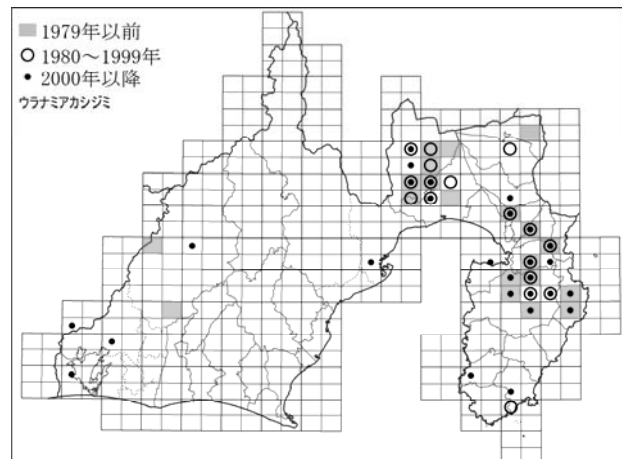
9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



伊豆市産の裏面 2015年6月13日 諏訪哲夫採集



ハヤシミドリシジミ *Favonius ultramarinus ultramarinus* (Fixsen, 1887)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 40 mm。オスの翅表は前翅、後翅とも青緑色に輝くが、メスではほぼ一様に灰褐色。幼虫の食餌植物は県内ではカシワのみ。卵で越冬。年 1 回、7 月上旬に出現し、8 月中旬まで見られる。夕方、オスはテリトリーを作って活発に飛翔する。

2. 分布

国外ではロシア南東部、朝鮮半島、中国東北部などに、国内では北海道、本州、九州に分布している。県内では富士宮市の富士山西麓に限って分布している。

3. 生息環境

富士山西麓の標高 700~1,000 m の草原に生育するカシワ林の疎林に限って生息する。

4. 生息状況

富士宮市の富士山西麓に限って生息している。隣接する富士市、裾野市、御殿場市からは記録がない。本県では 1955 年に初めて発見され、その後 2000 年頃までは個体数も多く、安定して生息していた。しかしその後カシワ林の伐採や、他の樹木が繁茂して疎林ではなくなったことから、本種の生育に適さない森林が多くなり、本種の個体数も減少している。最近の調査ではカシワ林は少ないながら残り、比較的広い範囲で本種も比較的安定して生息している。

5. 減少の主要因と脅威

富士山麓の各種の開発 (16) と、採草をしなくなったことなどにより植生遷移 (54) が進み、他の樹木の生長によりカシワ林が被圧され、本種の生息にとって適さない林になったことによると考えられる。

6. 保護対策

保護対策は講じられていない。カシワ林の保護と周辺の草原の草刈りや火入れなどの管理が望まれる。

7. 特記事項

神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類 (VU)、愛知県では絶滅危惧ⅠB類 (EN) にランクされている。

8. 主な文献

清 邦彦 (1988) 1988 年富士山の蝶. 駿河の昆虫, (144): 4153-4155

清 邦彦 (2012) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 [第 4 報]. 駿河の昆虫, (237): 6525-6529

諏訪哲夫 (1986) 富士山西麓の蝶. 駿河の昆虫, (133): 3853-3855

高橋真弓・諏訪哲夫 (1990) 故稲葉茂氏所蔵蝶類標本目録の発行について. 駿河の昆虫, (149): 4255-4283

高橋真弓 (2000) 1995~1999 年富士山麓における蝶類採集・目撃記録. 駿河の昆虫, (190): 5321-5332

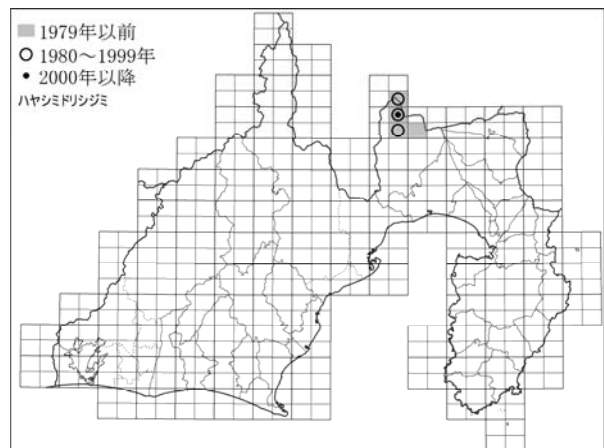
9. 標本

富士宮市産 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



富士宮市産♀裏面 2016年7月22日 池谷 正採集



クロシジミ *Niphanda fusca fusca* (Bremer & Grey, 1852)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN)]

1. 種の解説

開張およそ 35~40 mm。オスの翅表は暗紫色に光るが、メスは一様に暗褐色を呈する。オスは6月下旬から発生し、メスは8月末まで見られる。本種の生活史は特異で、1~2 齢はアブラムシやキジラミの分泌液を食べ、3 齢以降はクロオオアリに養われ、その巣の中で成長し幼虫で越冬する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部に、国内では本州、四国、九州に分布する。生息地は一般に局所的。県内からは伊豆、東部（富士山麓）、中部（静岡市）、西部などの低山地から広く記録があるが、いずれの地域でも局所的である。

3. 生息環境

アブラムシやキジラミ、クロオオアリが生息する雑木林や周辺に草地を伴う人手が加わった遷移の途中の不安定な里山が生息地となる。

4. 生息状況

2000 年頃までは県内から広く記録があったが、最近では里山の環境が悪化したことなどにより、生息地は非常に少なくなった。しかし富士山麓ではまだ安定して生息している。

5. 減少の主要因と脅威

開発 (23) や雑木林の手入れをしなくなったこと (53) により里山の環境が悪化していることが要因の一つとみられる。また特にクロオオアリとの共生関係のため生息環境が微妙に制限されている。

6. 保護対策

富士宮市では「特定希少野生動植物」に指定され (2011 年 3 月)、許可のない採集は禁止となっている。そのほかでは特にこの種の保護のための対策はとられていない。雑木林の存続と管理を行えば個体数の増加も期待できる。

7. 特記事項

神奈川県では絶滅したとみられる。該当標本は富士宮市の許可を得て採集したものである。

8. 主な文献

諏訪哲夫・高橋真弓 (2007) 故小林國彦氏の蝶類標本 (Ⅱ) . 駿河の昆虫, (220): 6101-6121

諏訪哲夫・鈴木英文・高橋真弓 (2012) 2011 年, 富士山地域の蝶類の記録. 駿河の昆虫, (237): 6534-6539

高橋真弓 (1969) 浜石岳のクロシジミ. 駿河の昆虫, (66): 1921

高橋真弓 (1992) 東伊豆町細野高原 7 月中旬の蝶. 駿河の昆虫, (160): 4551

高橋真弓 (2013) 静岡県および山梨県で採集されたクロシジミの所蔵標本 (1951~2007) . 静岡昆虫同好会 60 周年記念誌, pp. 178-181. 静岡昆虫同好会, 静岡.

9. 標本

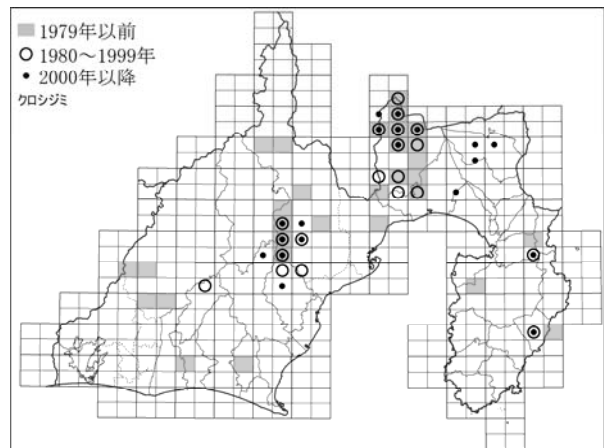
各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa

富士宮市産♀裏面 2014年7月11日 諏訪哲夫採集



クロツバメシジミ *Tongeia fischeri japonica* Fujioka, 1975

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②③) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

開張およそ 25 mm。翅の表は黒褐色、裏は褐色を帯びた白色で黒斑があり、尾状突起をもちその基部が薄い橙色となる。オスメスとも同じ斑紋なので区別しにくい。メスは翅形の丸みが強く、やや大きい。幼虫の食餌植物はツメレンゲ (ベンケイソウ科)。幼虫で越冬。成虫は4月下旬～11月初めまで、年に4～5回発生すると思われるが、詳しくは調べられていない。小型のうえ、主に崖に生息するため、地味で目立たない。

2. 分布

国外ではウラル、シベリア、モンゴル、中国北部から朝鮮半島、サハリンに、国内では本州中部、中国、四国、九州に分布する。県内では北遠の浜松市天竜区水窪町・佐久間町・龍山町から記録がある。

3. 生息環境

幼虫の食草であるツメレンゲが生育する石積みや崖、露岩地などが生息地となる。

4. 生息状況

県内では 1969 年に水窪町において初めて発見され、その後佐久間町、龍山町でも発見された。食草のツメレンゲが生育する場所は道路の法面、民家の石垣、残された巨岩などで、絶えず人による改変で生息地の消滅が危惧されている。今のところ生息地は各所に点在していることもあってある程度安定している。

5. 減少の主要因と脅威

道路改修などで石積みをコンクリート擁壁にしたり、崖や露岩地にコンクリート吹き付けをしたりすると (24)、ツメレンゲごと産地が失われることになる。また、本種は産地ごとに微妙な斑紋の変異が見られるため、1980年代から1990年代にかけて一部の愛好家の間で採集圧が高まった。最近は小康状態であるが、依然として人気は衰えず、採集圧は減っていない (41)。

6. 保護対策

生息地となる食草のツメレンゲの生育する道路法面の石積みや露岩地の保全が図られることが望ましい。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

榎本孝之 (1993) 磐田郡龍山村でクロツバメシジミを採集。駿河の昆虫, (164): 4676

福井順治 (1976) 佐久間・水窪の蝶類 (II)。駿河の昆虫, (95): 2793-2796

諏訪哲夫 (1970) 静岡県水窪町でクロツバメシジミを採集。駿河の昆虫, (68): 1981

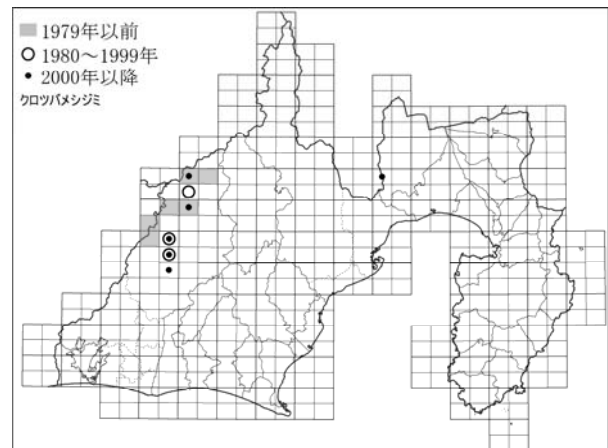
9. 標本

浜松市産 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa
浜松市産♀裏面 2012年10月11日 諏訪哲夫採集



ミヤマシジミ *Plebejus argyrognomon praeterinsularis* Verity, 1921

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN)]

1. 種の解説

開張およそ 30 mm。オスの翅表は青色、メスは暗褐色で、裏面は黒斑の他にオレンジ色の紋が目立つ。幼虫の食餌植物はコマツナギ (マメ科)。卵で越冬。成虫は年 4~5 回発生し、5 月上旬~10 月まで見られる。

2. 分布

国外ではユーラシア大陸北部から北米大陸北部にかけて広く、国内では本州特産で、東北地方の一部、関東・中部地方に分布する。県内では天竜川、大井川、安倍川、興津川、富士川の各河川及び富士山麓の一部から記録がある。

3. 生息環境

主に大河川のコマツナギが多い堤防や河川敷のほか、富士山麓の荒原的な環境にも生息する。コマツナギがクズや外来植物などに覆われて衰退するため、生息地が消滅していく。

4. 生息状況

1960 年代にはすでに富士川では姿を消し、富士山西麓からは 1990 年代終わり以降記録がない。現在は富士山の東麓の火山草原、興津川、安倍川、大井川及び天竜川の河川敷に残されているが、生息範囲はどの地域においても狭められる一方である。

5. 減少の主要因と脅威

河川敷や堤防などにおいては植物群落遷移の進行 (54)、外来植物の繁茂、改修工事や草刈りによるコマツナギ群落の刈り込み、公園化など様々な要因 (13)、近年の集中豪雨による河川の荒廃 (55) が考えられる。採集庄 (41) は高く、気田川の産地は報告されて数年で消滅した。

6. 保護対策

県立天竜高校では授業の一環として天竜川の生息地の保護に取り組んでいる。また、興津川上流の堤防では地元住民によりコマツナギの保護に配慮した草刈りが行われている。コマツナギの生育に配慮した、生息地とそれに続く周辺の環境の整備を行えば、個体数と生息地の拡大が期待できる。

7. 特記事項

日本産は、大陸の原名亜種とは別亜種とされているが、独立した別種の可能性がある。この場合、日本特産種となる。

8. 主な文献

- 斉藤伸行 (2015) 2013~2015 年, 旧本川根町のミヤマシジミ. 駿河の昆虫, (251): 6897
- 清 邦彦 (1982) 富士川のミヤマシジミ. 駿河の昆虫, (116): 3413-3426
- 清 邦彦 (1983) 静岡県及び山梨県における河川敷・堤防・海岸の蝶覚え書(1). 駿河の昆虫, (120): 3503-3530
- 高橋真弓 (1957) 静岡県及びその附近におけるミヤマシジミの分布. 駿河の昆虫, (18): 464-474
- 高橋真弓 (1995) 1994 年天竜川・大井川・安倍川・興津川・富士川水系におけるミヤマシジミ分布調査報告. 駿河の昆虫, (169): 4781-4785
- 高橋真弓 (2004) 安倍川流域におけるミヤマシジミの衰亡と現存標本. 駿河の昆虫, (206): 5741-5746

9. 標本

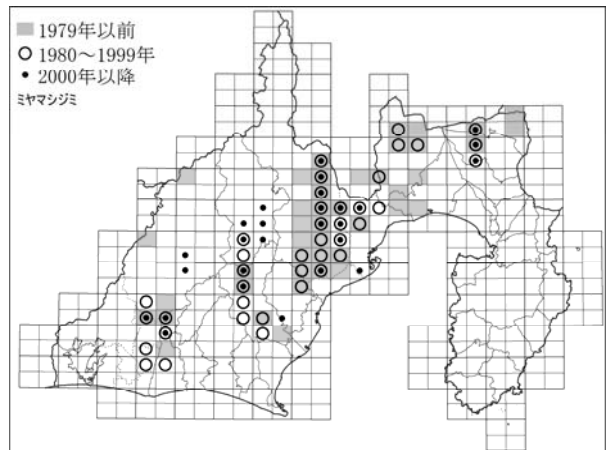
各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa

川根本町産♂裏面 2015年9月12日 諏訪哲夫採集



フタスジチョウ *Neptis rivularis insularum* Fruhstorfer, 1907

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード 1, 3, 6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 50 mm。表面は黒褐色の地色に白い帯が 2 筋あり、これが和名の由来となっている。裏面は地色がチョコレート色となる。幼虫の食餌植物はシモツケ、アイズシモツケ（バラ科）。幼虫で越冬。年 1 回の発生で、6 月中旬から発生し 8 月中旬まで見られる。林縁や灌木上を緩やかに飛翔し、クガイソウなどの花で吸蜜するほか、動物の糞などでも吸汁する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国、モンゴル、ヨーロッパなどに、国内では北海道、本州中部以北に分布する。県内では小山町富士山須走口登山道、静岡市葵区大井川上流及び安倍川源流、川根本町南赤石林道から記録があり、北遠地方からの記録はない。

3. 生息環境

垂直分布は標高およそ 1,000～1,600 m に生息する、亜高山性の種である。食草のある林縁や草原のほか、林道法面などでも見られる。

4. 生息状況

小山町の富士山須走で 1997 年と 2000 年に、川根本町南赤石林道では 1992 年に記録されたが、それ以降確認されない。静岡市葵区大井川源流域には 1950 年代から各地で多くの個体が記録されているが、2000 年以降個体数は激減している。

5. 減少の主要因と脅威

道路法面や灌木を交えた草地が、植生遷移やニホンジカの食害 (54) を受けて、食草となるシモツケやアイズシモツケに加えて訪花植物などが減少したため (54) と考えられる。

6. 保護対策

ニホンジカの食害から食草や訪花植物を守るため、ニホンジカの個体数を減少させる対策が望まれる。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

池谷 正・鈴木英文・諏訪哲夫 (2014) 大井川上流 7 月中旬の蝶. 駿河の昆虫, (245): 6737

諏訪哲夫 (1993) 南赤石林道 9 月上旬の蝶. 駿河の昆虫, (164): 4679-4680

高橋真弓 (1967) 静岡県とその周辺におけるミスジチョウ属 *Neptis* の分布. 駿河の昆虫, (60): 1667-1714

谷川久男 (2000) 富士山須走口馬返～標高 1700m の蝶. 駿河の昆虫, (191): 5372

宇式和輝 (2008) 大井川上流域・二軒小屋地域の蝶 [IV・2006 年]. 駿河の昆虫, (224): 6208-6222

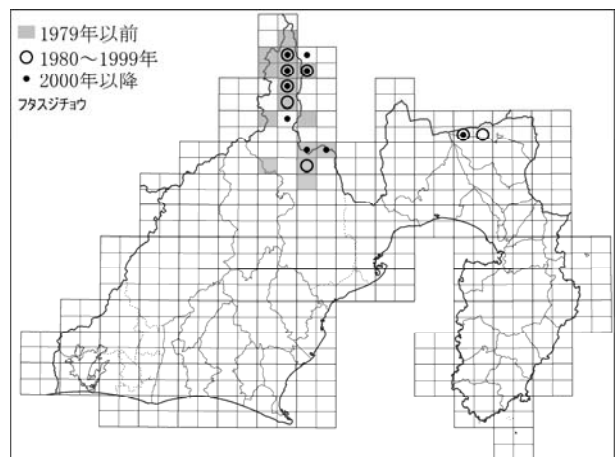
9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産の表面 2016 年 7 月 19 日 池谷 正採集



静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

体長はオス 57～63 mm、メス 55～59 mm。オスの体色は金属光沢の強い金緑色、メスはやや銅色がかかる。翅はオスでは濃紺で縦脈が金緑色、横脈が紫藍色なので、開閉すると青藍色に輝く。メスはほぼ黒く、薄い乳白色の擬縁紋がある。成虫はおおむね4月下旬から7月上旬にかけて出現するが、清水町柿田川では12月上旬まで見られることがある。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部から中央シベリアにかけて、国内では本州、九州に分布するが、産地は比較的限られる。県内での記録は伊豆・東部の伊豆市、伊豆の国市、三島市、駿東郡清水町の狩野川水系に限られていたが、浜松市佐久間町でも記録された。

3. 生息環境

主に平地から丘陵地の、周囲に樹林があり抽水植物や沈水植物が繁茂する比較的水温が低い清流に生息する。水温が比較的低いこととともに、適度に速い流れが確保されることも条件の一つである。移動性が弱く、羽化水域からあまり離れないので、生息地の水辺周辺に、休息や摂食のための草地や樹林が必要である。

4. 生息状況

清水町柿田川がよく知られた産地で、環境そのものが保全されており、現在最も安定した産地である。狩野川水系の各河川に不連続に生息している。河川工事の影響で抽水植物が減少し、それに伴って消失した生息地や、流路の変化や水量の減少などにより、激減した産地がある。

5. 減少の主要因と脅威

河川工事による河床や岸辺の攪乱や横断構造物の設置など、河川環境の人工化や流路の変更などによる抽水植物の消失 (13)、河川工事による泥水の流入や家庭排水など (31) の人為的要因が考えられる。大見川流域では夏期の流量の減少と、それに伴う抽水植物や水中の石などへの藻類の付着 (71) がみられた後に姿を消した。

6. 保護対策

人為的な河川環境の改変だけでなく、自然環境の変化による生息環境の消失も想定しておく必要がある。特に夏期の流量減少は大きな影響を与える可能性がある。また河川工事による流路の変化や河床の攪乱は、産卵基質となる抽水植物の消失につながり、生息にきわめて大きな影響がある。

7. 特記事項

分布域は広いものの産地は局限される。県内での分布も同様である。

8. 主な文献

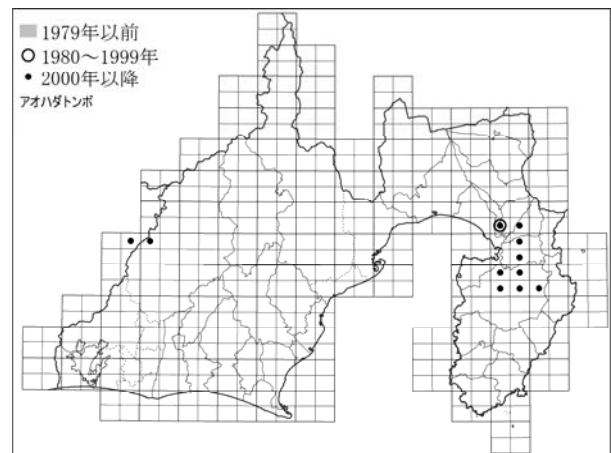
福井順治 (1986) 柿田川湧水群のトンボ相. 駿河の昆虫, (136): 3948-3955

9. 標本

伊豆市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



清水町 2013年11月8日 加須屋 真



(加須屋 真)

1. 種の解説

体長オスメスともに 35~41 mm 程度。オスメスともに全身が淡褐色で濃褐色の不規則な斑紋をもつ目立ちにくいトンボであり、成熟しても体色はほとんど変わらないが、オスの複眼は青みを帯びる。ホソミオツネトンボとは体形や斑紋が異なるほか、前翅と後翅の縁紋が重ならないことで区別できる。成虫で越冬するため成虫がほぼ 1 年を通じて出現しており、繁殖期の 3~5 月と越冬前の 9~11 月にはよく見られる。春季に池沼に飛来して雌雄が連結して抽水植物の葉や枯れた茎などに産卵する。幼虫期は短く、夏季には羽化して未成熟な個体は林内などに移動して生活する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシアからヨーロッパにかけて分布している。国内では北海道、本州、四国、九州に広く分布するが、四国、九州など暖地では生息地はかなり局地的である。県内では浜松市南区遠州浜など西部には記録が多く、中部、東部ではほとんど記録がない。

3. 生息環境

平地から山地の池沼に生息し、ヨシ、ガマなどの抽水植物が繁茂した場所に見られる。繁殖期の春季には池沼で見られるが、夏季から秋季には水辺を離れた森林内や林縁、草原などで生活し、越冬場所も水辺付近ではないため、かなりの距離を移動していると思われる。

4. 生息状況

県内ではこれまでに生息が確認された 37 メッシュのうち、この 10 年余の間に記録があったのは 4 メッシュだけであった。多産地の 1 つである浜松市南区遠州浜（松島町）ではまだ記録があるが、個体数は激減しており、同じく多産地であった磐田市桶ヶ谷沼と鶴ヶ池では記録されなくなった。夏季、秋季に水辺以外で確認される記録も減少している。

5. 減少の主要因と脅威

水生植物の多い池沼が減少 (12) することもあるが、池沼への農薬や生活排水の流入による影響 (31、32) が個体数の減少の要因となっている可能性がある。成虫で氷点下の低温にも耐えられる北方系の種であり、猛暑・干ばつが頻発する最近の高温傾向の気象条件の影響 (71) も考えられる。

6. 保護対策

現存する生息地では大きな環境変化が起こらないようにする。農薬の影響を受けやすい種である可能性もあるため、本種の生息地ではその影響を排除できるように配慮する必要もある。

7. 特記事項

関東や北陸など全国的にも減少傾向が著しい地方が多い。

8. 主な文献

鵜飼貞行 (1978) 静岡県中部・西部のトンボ類の採集記録. 駿河の昆虫, (102): 3028-3030

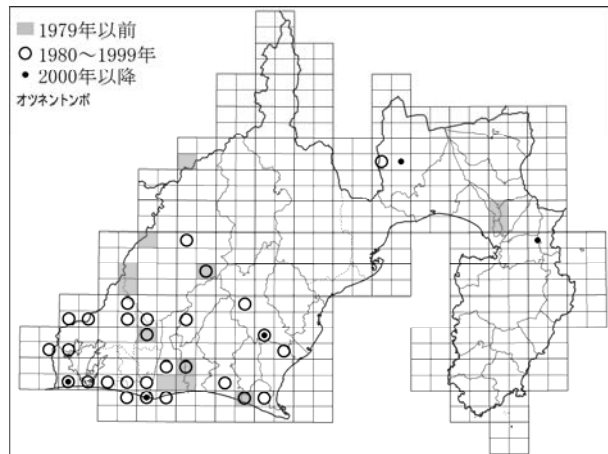
福井順治 (1983) 磐田市桶ヶ谷沼におけるトンボ類の季節消長. 駿河の昆虫, (121): 3533-3538

9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M.Fukui
浜松市 2011年4月4日 福井順治



(福井順治)

ホソミオツネトンボ *Indolestes peregrinus* (Ris, 1916)

アオイトトンボ科 Lestidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 5

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長オスメスともに 33~42 mm 程度。未成熟な時は全身が淡褐色で濃褐色の斑点をもつが、成熟するとオスは青色となり、メスも薄い青色になる個体が多い。オツネトンボとは体形や斑紋が異なるほか、前翅と後翅の縁紋が重ることによって区別できる。成虫がほぼ 1 年を通じて出現しているが、繁殖期の 3~5 月と越冬前の 9~11 月に見ることが多い。春季に池沼や水田に飛来し、雌雄が連結して抽水植物の茎に産卵する。幼虫期は短く、6~8 月にかけて羽化した個体は、草原や林縁などに移動して生活し成虫で越冬する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国に分布している。国内では本州、四国、九州には広く分布するが、北海道や南西諸島では単発的な記録のみである。県内では東部、中部、西部いずれにおいても記録された地点は多いが、多数の個体が見られる池沼や湿原は少ない。

3. 生息環境

平地から山地の抽水植物が繁茂した池沼、湿地、水田や緩い流れに生息する。こうした環境では繁殖期の春季に見られるが、夏季から秋季には、主として山地の林縁や草原などで見ることが多い。

4. 生息状況

県内ではこれまでに生息が確認された地点はかなりの多く 74 メッシュに及ぶが、この 10 年余の間に記録があったのは 5 メッシュだけであった。1990 年から 2004 年の 15 年間に確認されたメッシュが 38 であったので、最近になって特に減少傾向が顕著になったことがわかる。多産地の 1 つであった富士宮市小田貫湿原ではまだ記録があるが、個体数は激減している。

5. 減少の主要因と脅威

これまで全国的にも減少している種とは考えられてこなかったもので、幼虫の生育地として水田に依存する割合が高い地域では、近年水田で使用されている農薬の影響 (32) が考えられる。一方で山地の緩い流れで生育する場合には、減少の理由を推測することが難しい (99)。本種は成虫で越冬するため低温には耐えられるが、暑さに弱い場合には最近の高温傾向の気象条件の影響 (71) もありうる。

6. 保護対策

もともと広範に分布・生息している種であり、特定の生息地を保全することでは対応できないが、現存する主要な生息地の環境を守る必要はある。水田に依存していて農薬の影響を受けやすい種であるため、その影響を排除できるように配慮する必要がある。

7. 特記事項

本種の減少傾向はまだ気づかれていない地方が多く、都道府県版レッドリストにも掲載された例は少ないが、今後の経過を注目する必要がある種である。

8. 主な文献

加藤哲男 (1990) 引佐郡のトンボ相 (第 1 報). 駿河の昆虫, (152): 4353-4361

福井順治・加須屋 真 (1991) 田方郡のトンボ類の記録. 駿河の昆虫, (153): 4373-4375

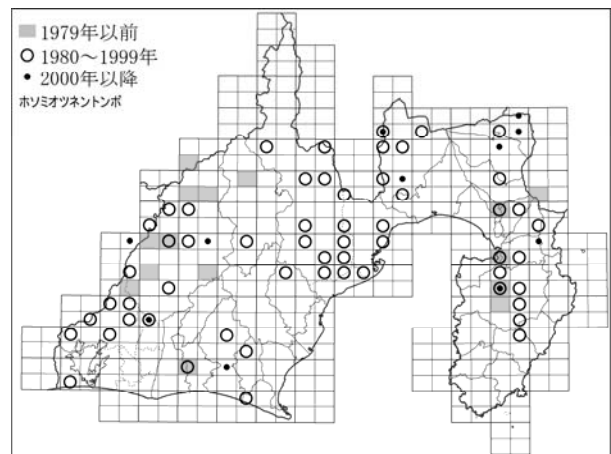
9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(福井順治)



袋井市 2011年11月1日 福井順治



静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

体長はオス 75~87 mm、メス 75~88 mm。腹部第3節がくびれず寸胴な形をしたやや大型のヤンマである。体色はオスメスほとんど差がなく、黒地に黄色または黄緑色の斑紋がある。胸部側面に2本の黒色条がある。翅の基部に鮮やかな橙色斑があり、これが和名の由来の一つである。6~9月にかけて出現する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国に、国内では東北南部と関東以西の本州、四国、九州に分布するが、産地は限られる。県内では三島市、駿東郡清水町、静岡市、牧之原市、磐田市、浜松市などに記録がある。

3. 生息環境

主に平地や丘陵地の、周囲に樹林があり、ヨシ、ガマ、マコモなど高茎の抽水植物が豊富な湿地や池沼に生息する。また放棄水田で見つかることもある。

4. 生息状況

記録地は県内各地に点在するものの、確実な産地は少なく、どの産地でも個体数は少ない。特に環境変化が激しい都市部周辺では見られなくなっている。本種は主に朝夕の薄暗い時間帯に活動するため、生息状況を把握しにくいという点もある。

5. 減少の主要因と脅威

湿地環境の減少や消滅 (53、54)、湿地及びその周辺の開発行為 (15-1) などの要因が考えられる。三島市では宅地造成 (23) により産地は消滅した。

6. 保護対策

本種は樹林に囲まれた湿地を好む傾向がみられること、また、朝夕の摂食飛行時に湿地周辺の開けた草原上を飛び回ることから、湿地環境とその周辺の、やや広範囲にわたる環境保全の必要がある。

7. 特記事項

全国的に産地が限られ、安定した産地が少ない。

8. 主な文献

福井順治 (1980) 浜松市南部でネアカヨシヤンマを採集. 駿河の昆虫, (126): 3674-3675

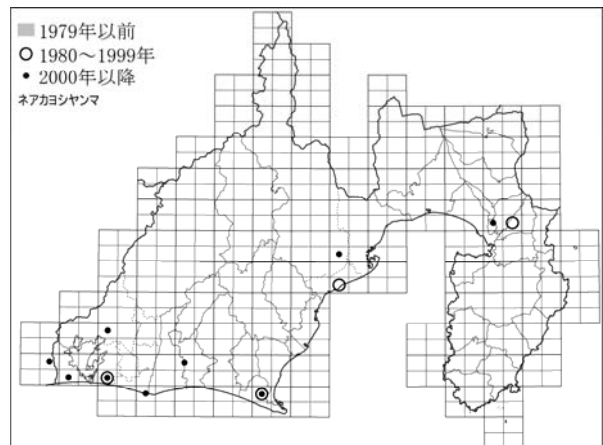
鵜飼貞行 (2001) 静岡県中部から愛知県東部にかけて記録したトンボについて. 駿河の昆虫, (193): 5399-5414

9. 標本

静岡市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



清水町 2012年8月20日 加須屋 真



(加須屋 真)

1. 種の解説

体長オスメスともに 66~77 mm 程度。未成熟時は全身が淡褐色であるが、成熟するとオスメスともに頭部・胸部と腹部の前部が淡緑色、腹部の中後部は黒~褐色を呈する。複眼が大きく体形は細身でオスの尾部付属器、メスの尾毛は細長い。成虫は 7~11 月にかけて出現し、夏季には日中は薄暗い林内の枝に静止しており、早朝と夕方に林縁で摂食飛行をする。秋季には日中にも水田や湿地に飛来してオスはホバリングを交えて飛行し、メスを待って連結・交尾を行う。メスは単独で湿った土や柔らかな朽ち木に産卵し、卵で越冬する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国に分布する。国内では青森県以南の本州、四国、九州に広く分布するが、近年では激減した地域も多い。県内では平地から低山地を中心に東・中・西部のほぼ全域から広く確認記録がある。

3. 生息環境

平地から丘陵地の水田、湿地、池沼や河川敷の水たまりに生息し、近隣に樹林があるところが好まれる。ため池や用水池のような安定した水域よりも、水田や河川敷などのように一時的に水がたまる水域が生育環境となっている。

4. 生息状況

県内では平地から低山地を中心にほぼ全域の 57 メッシュでふつうに見られたが、各地で激減しており最近の 10 余年の調査では 8 メッシュしか確認できなかった。1990~2004 年に確認されたメッシュ数が 32 であったことから、減少傾向がはっきり見られる。

5. 減少の主要因と脅威

幼虫の生育地として水田に依存する割合が高い種と考えられるので、近年水田で使用されている農薬の影響 (32) が主要因と考えられる。湿地や河川敷の水溜まりなどが開発や河川改修で失われること (13) も、生育地の減少になっている。

6. 保護対策

水田に依存していて農薬の影響を受けやすい種であるため、まずはその影響を排除できるように配慮する必要がある。もともと広範に分布・生息している種であったが、確実に生息している主要な生息地の環境を維持する必要がある。

7. 特記事項

全国的にも本種の激減は注目されるようになっており、本県でも減少傾向が顕著であるので、今後の経過を注目する必要がある種である。

8. 主な文献

細田昭博 (1985) 浜松市のトンボ相. 駿河の昆虫, (129): 3745-3753

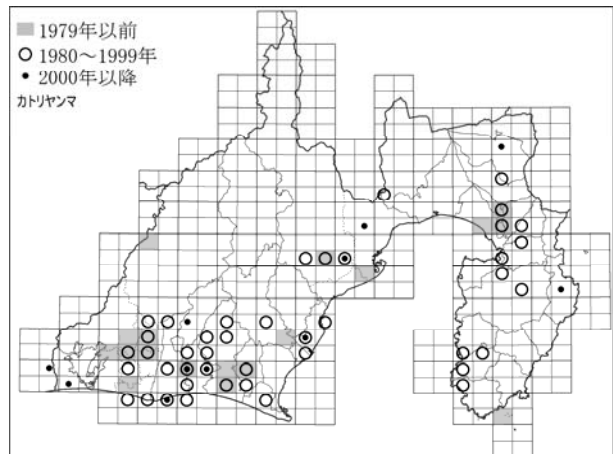
福井順治 (1990) 小笠郡と掛川市のトンボ相. 駿河の昆虫, (152): 4341-4352

9. 標本

静岡市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



磐田市 2011年10月31日 福井順治



(福井順治)

ヨツボシトンボ *Libellula quadrimaculata asahinai* Schmidt, 1957

トンボ科 Libellulidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長はオス 39~52 mm、メス 38~49 mm。黄褐色でずんぐりとした中型のトンボで、翅の前縁の結節部分に褐色斑があり、これが和名の由来になっている。体色はオスメスともほとんど差がなく、黄褐色の地色に黒色の条斑がある。4月下旬~6月下旬にかけて出現する。

2. 分布

種 *quadrimaculata* は、国外ではユーラシア大陸に広く分布し、複数の亜種が知られている。国内産は亜種 *asahinai* とされている。日本固有亜種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では伊東市、東伊豆町、三島市、小山町、富士宮市、静岡市、御前崎市、磐田市、浜松市、湖西市に記録があるほか、御殿場市、富士市に未発表の記録がある。

3. 生息環境

主に平地から丘陵地、低山地の、抽水植物が繁茂する湿地や池沼、放棄水田などに生息する。

4. 生息状況

富士宮市の小田貫湿原や磐田市桶ヶ谷沼は個体数も多く確実な産地であるが、その他では個体数が少なく確実な産地とは言い切れない。比較的個体数の多い御殿場市の複数の産地はいずれも放棄水田で、今後の土地利用の変化に伴い消失する可能性が高い不安定な産地である。

5. 減少の主要因と脅威

三島市では、湿地の宅地開発 (15-1) により産地は消滅した。東部の生息地の多くが放棄水田であり、これらは用地転用があれば消滅する産地である (23)。磐田市桶ヶ谷沼は安定的な産地であるが、過去にアメリカザリガニの異常繁殖 (52-3) により激減した。富士宮市小田貫湿原は、遷移の進行による乾燥、草原化とそれに伴う湿原内の池塘の狭小化、消失の影響 (54) が懸念される。

6. 保護対策

湿原そのものを保全すること、遷移の進行による草原化を食い止め、湿地環境を維持することが重要である。またアメリカザリガニが生息する産地では、異常繁殖に対し常に監視する必要がある。

7. 特記事項

寒冷な地域に分布の中心があり、本県での産地は比較的限られるが、近年東部の御殿場市では、複数の生息地が確認された。

8. 主な文献

福井順治 (1987) 田貫湖と小田貫湿原のトンボ. 駿河の昆虫, (138): 3985-3994

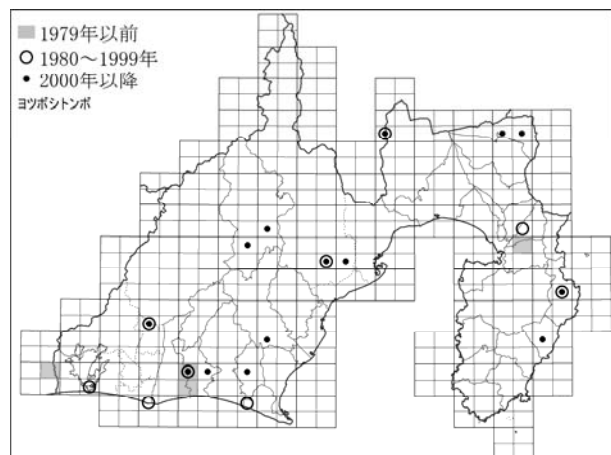
福井順治 (1995) 磐田市桶ヶ谷沼におけるトンボ類の羽化殻調査. 駿河の昆虫, (169): 4775-4781

9. 標本

磐田市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



磐田市 2011年4月29日 加須屋 真



磐田市桶ヶ谷沼は安定的な産地であるが、過去にアメリカザリガニの異常繁殖 (52-3) により激減した。富士宮市小田貫湿原は、遷移の進行による乾燥、草原化とそれに伴う湿原内の池塘の狭小化、消失の影響 (54) が懸念される。

(加須屋 真)

1. 種の解説

体長オスメスともに 28～40 mm 程度。胸部側面に小黒点があり黒条が発達して縞模様のように見える。成熟したオスの顔面が青白いことが特徴で、アカトンボ類の仲間としては小型である。成虫は 6～11 月にかけて出現し、9～10 月に観察されることが多い。成熟したオスはヨシなどの抽水植物が密生した湿原の植物などに静止してなわばり行動を行う。メスが飛来すると交尾態となって近くに静止し、交尾終了後は連結態となって連続的に打水産卵をする。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシア極東に、国内では北海道から九州まで広く分布するが、生息地はかなり限られている。県内では東部から西部まで各所に記録があり、西部には産地が多く磐田市桶ヶ谷沼・鶴ヶ池や浜松市南区遠州浜（松島町）は多産地として知られていた。

3. 生息環境

平地から丘陵地にあるヨシ、マコモ、ヒメガマなどが密生した池沼や湿原に生息し、開放的なため池にはあまり生息しない。海岸や河口付近に成立した砂丘後背湿地や、降水量の多い時期だけにできる一時的な水辺に生息する例が多い。

4. 生息状況

県内で記録がある 33 メッシュのうち、2005～2016 年に生息が確認されたのはわずか 9 メッシュにとどまっており、減少傾向が顕著である。今回記録があった場所でも個体数がわずかなところがほとんどであった。かつては多産地であった磐田市桶ヶ谷沼でも、近年は個体数が非常に少ない状態が続いている。

5. 減少の主要因と脅威

ヨシやヒメガマの多い池沼や湿地は埋め立てや開発で失われることが多く（12、15-1）、生息可能な環境が少なくなっている。猛暑や干ばつなどの異常気象（71）が続いて湿原が干上がることも脅威である。

6. 保護対策

海岸や河口付近の湿原が主要な生息地であるため、防災対策などで改変されやすいこうした場所の工事に際しては生息地の環境を残す配慮が必要である。

7. 特記事項

生息地から離れた山地や市街地で発見された例が少ないので、アカトンボ類としては移動性があまりない種である。

8. 主な文献

細田昭博（1985）浜松市のトンボ相．駿河の昆虫，（129）： 3745-3753

福井順治（1990）小笠郡と掛川市のトンボ相 駿河の昆虫，（152）： 4341-4352

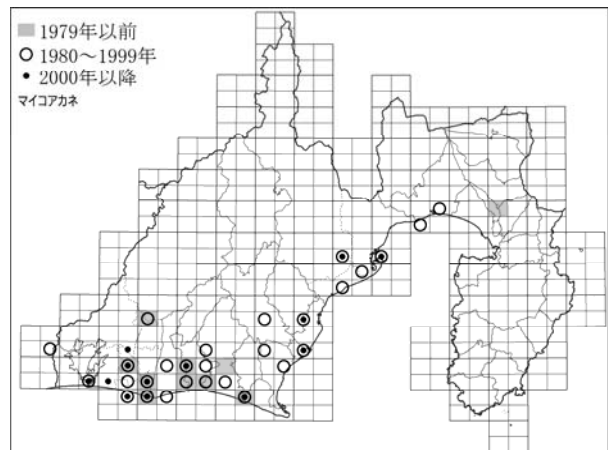
福井順治・加須屋 真（1998）朝比奈博士による静岡県産トンボ類の記録．駿河の昆虫，（182）： 5091-5110

9. 標本

磐田市産：ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M.Fukui
浜松市 2010年9月22日 福井順治



(福井順治)

クチナガコオロギ *Velarifictorus aspersus borealis* Gorochov, 1985

コオロギ科 Gryllidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更コード 6

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長オス 11~14 mm、メス 14~16 mm。各地にふつうに生息するツヅレサセコオロギ *V. micado* (Saussure, 1877) によく似るが、オスは顎が長く、メスは産卵管が短いことから容易に区別できる。後頭部が淡色となることも特徴の一つである。鳴き声は、「リュッ、リュッ」と切って鳴き独特である。昼間は多くの場合、単独又はペアで、石や枯葉の下などに潜んでいる。行動はあまり素早くなく、跳びはねるよりも歩き回る方が多い。

2. 分布

国外では韓国、中国に、国内では静岡県以西の本州、四国、九州に分布する。県内では天竜川以西に数ヶ所産地があるだけで、局所的な分布をする。

3. 生息環境

ほとんどの生息地は、墓地や庭、人家付近にある、よく手入れされた丈の低いチガヤなどの草地である。比較的乾燥した場所を好むようである。

4. 生息状況

成虫発生数は年による変動が大きい、いずれの生息地においても、通常個体数は多くない。近年生息が確認出来ない産地がある。

5. 減少の主要因と脅威

生息環境に変化がない場合の減少要因は不明 (99) であるが、生息地は局所的で人間活動と重なる場合が多く、宅地開発や道路工事などの小さな開発 (23、24) でも姿を消すと考えられる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

過去に伊豆半島にも分布するという報告がされたが、現在まで再確認はない。

8. 主な文献

Gorochov, A. V. (1985) On the fauna of Gryllidea (Orthoptera) of China. *Ent. Obozr.*, 64: 89-107

石川 均 (1991) クチナガコオロギを浜北市で採集. 駿河の昆虫, (156): 4464

石川 均 (1993) クチナガコオロギの産地追加. 駿河の昆虫, (164): 4681

杉本 武 (1980) 静岡県におけるクチナガコオロギの新産地. 駿河の昆虫, (108): 3179-3180

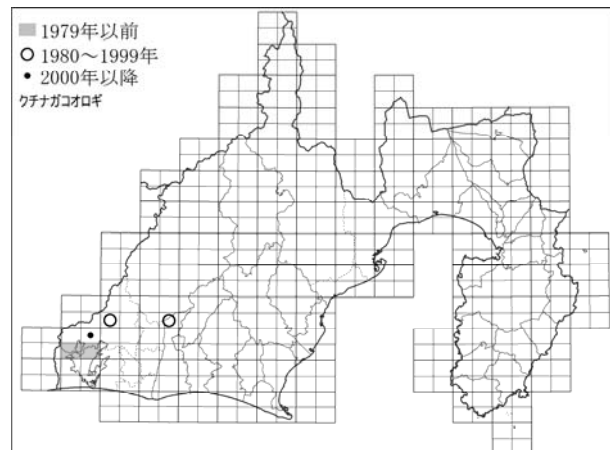
9. 標本

浜松市北区三ヶ日町産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(石川 均)



浜松市北区三ヶ日町 2017年9月13日 石川 均



1. 種の解説

体長オス 6.0~6.8 mm、メス 7.1~8.6 mm。小さなコオロギの一種で、生息地の砂の色に似た体色、模様をしていて見事な保護色となっている。マダラスズ *D. nigrofasciatus* (Matsumura, 1904) やカワラスズ *D. furumagiensis* (Ohmachi & Furukawa, 1929) に少し似ているが、メスの産卵管が長いことで容易に区別できる。成虫は6~12月まで見られる。海浜性種ではなく、砂地性の種である。

2. 分布

国外では沿海州、ハバロフスク南部、中国、インド、スリランカなどに、国内では北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では東部、中部、西部に分布している。

3. 生息環境

海岸の砂浜では、最も内陸寄りの場所に生息している。河川では砂地が広がる場所に生息している。いずれの場所も、植生は貧弱で全くないこともある。

4. 生息状況

海岸の砂浜の生息地では生息密度は低く確認できなくなった場所もあるが、河川の生息地では大きな変化はなく生息しているように思われる。なお、遠州浜や中田島砂丘では個体数が多い。

5. 減少の主要因と脅威

海浜部の生息地はオフロード車の走行 (71) が目立ち環境条件の悪化が続いているが、河川の生息地は以前と変わらない場所が多い。

河川の生息地は富士川、安倍川、大井川、天竜川で知られているが、海浜部の生息地は焼津市以西に限られる。防潮堤工事による生息環境の縮小 (14)、植生遷移 (草地化) (54) も脅威となる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

富士川や安倍川の河原に生息する個体群の体色は黒みが強く、西部の海岸や砂丘に生息する白みの強い個体群とは一見違う種に見える。

コオロギ科を細分して、本種はヒバリモドキ科 Trigonidiidae とされることがある。

8. 主な文献

杉本 武 (1976) 安倍川、藁科川下流域の河川敷周辺に生息する鱗翅目および直翅目昆虫. 安倍川動植物生態調査第二次報告書, pp. 10-26. 建設省中部地方建設局静岡河川工事事務所, 静岡.

杉本 武 (1977) 大井川下流域の河川敷及びその周辺の昆虫相調査. 大井川動植物生態調査第一次報告書, pp. 41-50. 建設省中部地方建設局静岡河川工事事務所, 静岡.

杉山高史 (2004) 焼津市石津浜海岸のバッタ類の採集・目撃記録. 駿河の昆虫, (208): 5798-5799

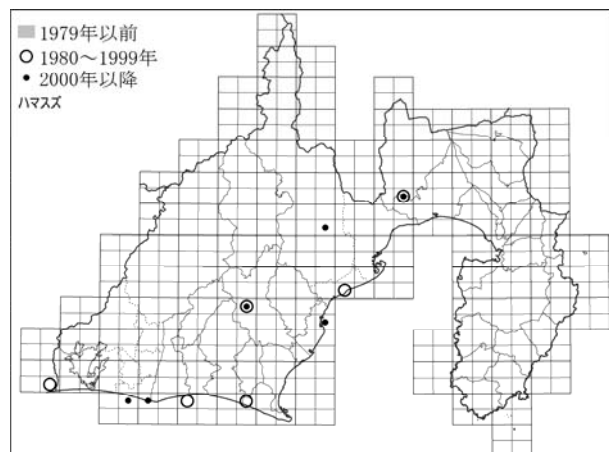
9. 標本

富士宮市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(石川 均)



富士宮市朧島 2014年9月15日 石川 均



アマギクチキウマ *Anoplophilus amagisanus* Ishikawa, 2003

カマドウマ科 Raphidophoridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更コード 1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長オス 16.5~19.4 mm、メス 12.6~17.0 mm。黒褐色に黄褐色の斑紋を混じえ、真鍮様の金属光沢がある。生時は苔が生えたような薄黄緑色をかすかに帯びる。産卵器は赤褐色で、下片の鋸歯数は通常7。富士山、関東山地に分布するクチキウマ *A. acuticercus* Karny, 1931 に似るが、産卵器の鋸歯数が多いことで識別できる。

2. 分布

静岡県固有種で、伊豆半島の天城山だけに分布する。今までに確認された場所は天城連峰の旧二本杉峠と猫越岳付近の稜線部に限られている。

3. 生息環境

稜線部のブナ林やイヌツゲ林、アセビ林に生息し、樹皮下や朽ち木内、樹上の重なり合った枯れ葉の間などに潜んでいる。

4. 生息状況

現在までに採集されたのは10個体程度にすぎない。より大型で分布の広いオオクチキウマ *A. major* Ishikawa, 2003 と混生するが、オオクチキウマが各所で見られるのに対し本種は局所的で生息密度はかなり低いと思われる。

5. 減少の主要因と脅威

確認された個体数は少なく生息状況の変化を十分に把握できていないが、ニホンジカにより林床植生が食害されることによる林内の乾燥化などの環境変化(54)が、本種の生息に影響を及ぼす可能性が高い。

6. 保護対策

特になし。皮子平では防鹿柵により囲って植生の保護を行っている場所があるが、その付近ではまだ本種の確認はされていない。

7. 特記事項

静岡県の伊豆半島、それも天城山の稜線部付近にのみ生息する固有種である。生息数が少ないため、環境変化を起こさないようなニホンジカの個体数管理が望まれる。

8. 主な文献

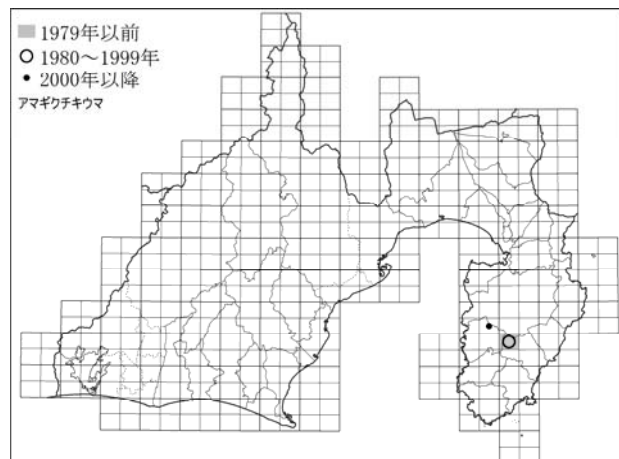
Ishikawa, H. (2003) *Anoplophilus* species in Japan. (Orthoptera, Raphidophoridae, Proterogrophilinae). *Tettigonia*, (4): 7-23

9. 標本

伊豆市湯ヶ島産：大阪市立自然史博物館所蔵（ホロタイプ）



伊豆市湯ヶ島 猫越岳 2012年8月2日 石川 均



(石川 均)

ヤマトバッタ *Epacromius japonicus* (Shiraki, 1910)

(=ヤマトマダラバッタ)

バッタ科 Acrididae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長(翅端まで) オス 27~32 mm、メス 34~39 mm。
生息地の環境に合わせた保護色となり、明るい砂地では白っぽく、暗い砂地では暗色を呈する。遠州浜、中田島砂丘では緑色型も出現する。よく飛び、後翅は淡いブルーをしている。年1化で、初夏に成虫が出現し、晩秋まで見られる。

2. 分布

日本固有種で、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では焼津市石津浜以西の砂浜海岸及び富士川、安倍川などの大河川の河原に分布する。

3. 生息環境

国内では海岸や河川の低水敷で植物がまばらに生えた砂地に生息する。海岸ではより内陸側の部分、河川では規模の大きな河川に限られ主に礫床の中で広く砂地となっているところに住む。

4. 生息状況

遠州灘海岸の生息地では、天竜川河口から太田川河口にかけてや弁財天川河口付近で生息数は多いものの、その他では生息数は少ない。また、中田島砂丘や遠州浜の砂地には広範囲に多数生息している。河川では、富士川で比較的多いが、安倍川では生息密度が低い。

5. 減少の主要因と脅威

生息地へのレジャー車両の乗り入れ(71)により、生息環境が悪化、縮小している。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

現時点では絶滅のおそれがあるほどの状況にはないが、静岡県レッドデータブック(2004)時よりもさらに生息環境の悪化が進んでいる点で注目していく必要がある。全国的に生息地は減少している。

8. 主な文献

浜口哲一(1996) 浜松市中田島砂丘のヤマトマダラバッタ. バッタリギス, (107): 67

石川 均(1987) ヤマトバッタ内陸部に産す. 月刊むし, (202): 5

石川 均(1998) ヤマトバッタの安倍川での追加記録. 駿河の昆虫, (181): 5087

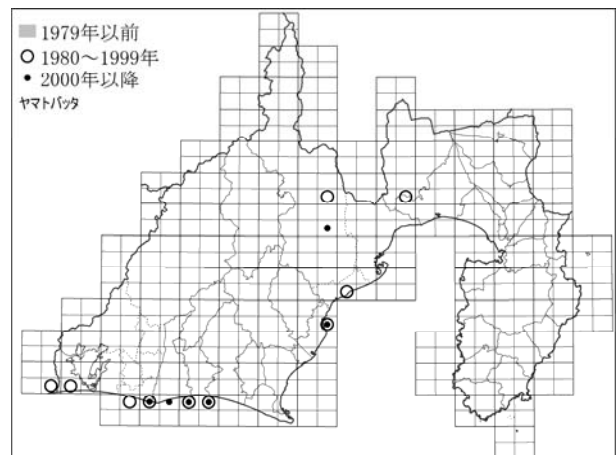
杉山高史(2004) 焼津市石津浜海岸のバッタ類の採集・目撃記録. 駿河の昆虫, (208): 5798-5799

9. 標本

浜松市産: 平塚市博物館所蔵



©2019 H. Ishikawa
浜松市南区中田島 2014年9月17日 石川 均



(石川 均)

カケガワフキバッタ *Parapodisma awagatazensis* Ishikawa, 1998

バッタ科 Acrididae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長オス 19.9~23.3 mm、メス 22.2~31.5 mm。鱗片状の短い翅をもつフキバッタの一種である。緑~黄緑色の体で、オスでは体側に黒斑をもつものが多い。県内では主として天竜川以西に分布しているヒメフキバッタ *P. etsukoana* Kobayashi, 1986によく似ているが、分布域が異なる。成虫は7~10月まで見られる。

2. 分布

日本固有種で、静岡県内にもみ生息する。大井川と天竜川に挟まれた地域に分布が限定されている上、牧ノ原台地南部や北部山岳地には分布しない。

3. 生息環境

耕作地脇や林縁部などの草地に生息し、特に草刈りなどで最低年一度は人の手の入る環境によく見られる。いわゆる里山の昆虫といえる。

4. 生息状況

基準産地である掛川市栗ヶ岳の草地では個体数は比較的多いが、その他の産地では少ない。耕作放棄に伴う周辺草地の植生遷移の進行、宅地開発などによる生息地そのものの消失が今もなお続き、各所で生息地の分断が顕著になっている。

5. 減少の主要因と脅威

植生遷移 (54) や開発による生息地の消失と分断化 (23, 24) が、本種の存続にとって大きな脅威といえる。

6. 保護対策

分布の中心である掛川市では条例により「指定希少野生動植物種」に指定され (平成 18 年)、生息環境の保全も図られている。世界農業遺産に指定された茶草場農法は、カケガワフキバッタの生息地保全に大きな貢献をしていると考えられる。

7. 特記事項

静岡県固有の昆虫であり、里山に生息していて分布域も狭いので絶滅に向かわないよう注目を続けていく必要がある。

8. 主な文献

石川 均 (1992) 静岡県のミカドフキバッタ属について. バッタリギス, (94): 27-31

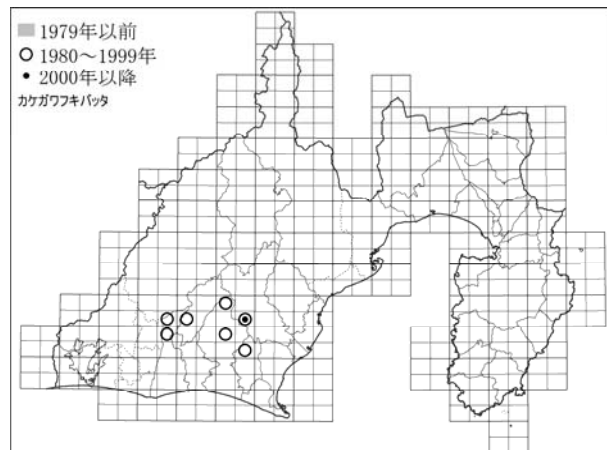
Ishikawa, H. (1998) A new *Parapodisma* species (Orthoptera, Acrididae, Catantopinae) from Shizuoka Prefecture, central Honshu, Japan. *Jpn. J. syst. Ent.*, 4(1): 173-178

9. 標本

掛川市産: 国立科学博物館所蔵(ホロタイプ、パラタイプ)、大阪自然史博物館所蔵(パラタイプ)、愛媛大学ミュージアム所蔵(パラタイプ)



掛川市東山 栗ヶ岳 2008年8月13日 石川 均



(石川 均)

1. 種の解説

体長 7.5~9.0 mm。淡黄色で背面は多少とも不規則な多数の黒色横条を装い、前胸背板の横条は太く明瞭で5~7条、半翅鞘では縦に連絡して不規則な格子状を呈する。体はおおむね短円筒形で後方に細まり、前肢は短い捕獲脚、中肢は細長い把握脚、後肢は扁平な遊泳脚となる。成虫は秋から春にかけて個体数が多いが、夏にも見られる。おおむね植食性と考えられ、藻類などの内容物を吸収するようである。

2. 分布

国外では台湾、中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では磐田市桶ヶ谷沼の記録があり、磐田市鶴ヶ池、浜松市南区松島町、浜松市西区坪井町、浜松市北区引佐町別所での採集例がある（未発表）。

3. 生息環境

ヨシやガマなどの抽水植物が繁茂する、比較的深い池沼に生息する。

4. 生息状況

県内では生息地は限られているが、生息地での個体数は多かった。浜松市南区松島町では、2005年頃までは多数見られたが、近年個体数が著しく減少している。磐田市桶ヶ谷沼では直近の調査において複数個体が確認されたものの、近似のホッケミズムシ *Hesperocorixa distanti hokkensis* (Matsumura, 1905) が激減あるいは絶滅したと考えられることから、今後の動向が注目される。

5. 減少の主要因と脅威

県内の既知生息地では、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化 (54)、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊 (54) などが脅威となる。

6. 保護対策

桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

7. 特記事項

直近の桶ヶ谷沼の調査では、地下水を汲み上げて放流している場所付近でのみ生息が確認された。

8. 主な文献

杉山恵一 編 (1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-。 (財) 日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

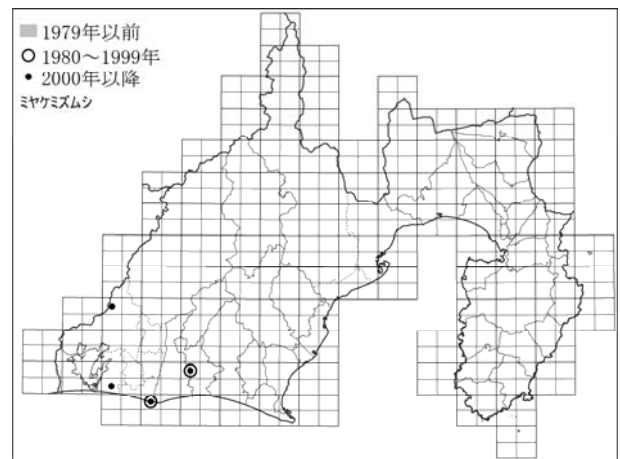
9. 標本

浜松市産、磐田市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa

浜松市産 2015年10月1日 石川 均採集



(多比良嘉晃)

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

体長 28~38 mm (大顎を除く)。一見クワガタムシを思わせる大型の甲虫で、体は黒色、頭部は大きく、大顎はよく発達し、体長の約 1/8 の長さには達する個体もある。前肢脛節は多少とも掌状に広がって掘削脚となる。

成虫は夏季に見られ、夜行性で、昼間は砂地に深い坑道を掘って潜っており、夜間に砂上に出て活発に活動し、他の小昆虫を捕食する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、台湾、東南アジア、インドなどに広範囲に、国内では本州、四国、九州に局所的に分布し分布する。県内では牧之原市相良・波津、御前崎市池新田・門屋、掛川市浜野、磐田市竜洋中島、浜松市天竜区二俣町で記録がある。

3. 生息環境

海岸や大河川下流域の砂地に生息している。

4. 生息状況

県内では遠州灘海岸から牧之原市の駿河湾沿岸にかけての海浜に生息するが、個体数は多くない。

5. 減少の主要因と脅威

海岸の護岸工事 (14) や河川改修 (13)、海岸への車両の乗り入れ (71) などによって生息地が消滅・破壊されるおそれ大きい。また、大型で格好が良いので愛好家に人気があり、高い採集圧 (41) にさらされている。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

かつて個体数が多かった御前崎市池新田浜岡砂丘の産地は公園化された。

8. 主な文献

- 原木直美 (1986) 浜岡砂丘の灯火で採集した甲虫類. 静岡の甲虫, 4(1/2): 14-16
- 平井克男 (1993) 静岡県産ゴミムシ類採集記録 (I). 静岡の甲虫, 10(2): 14-24
- 平井剛夫 (2005) 相良町の海岸でオオヒョウタンゴミムシを採集. 駿河の昆虫, (211): 5864
- 大庭俊司 (2015) 磐田市竜洋中島の側溝で採集した甲虫 2 種. 駿河の昆虫, (250): 6863
- 田形和弘 (1987) オオヒョウタンゴミムシ相良にも産す. 静岡の甲虫, 5(1/2): 29
- 多比良嘉晃・松本雅道 (2000) 静岡県における海岸性甲虫相. 環境システム研究, (7): 39-71
- 竹林大介 (2013) 牧之原市 (旧相良町) の海岸でのオオヒョウタンゴミムシの採集記録. 駿河の昆虫, (242): 6668
- 坪井俊久 (1977) 天竜市二俣町の甲虫類 (II). 駿河の昆虫, (98): 2871-2878

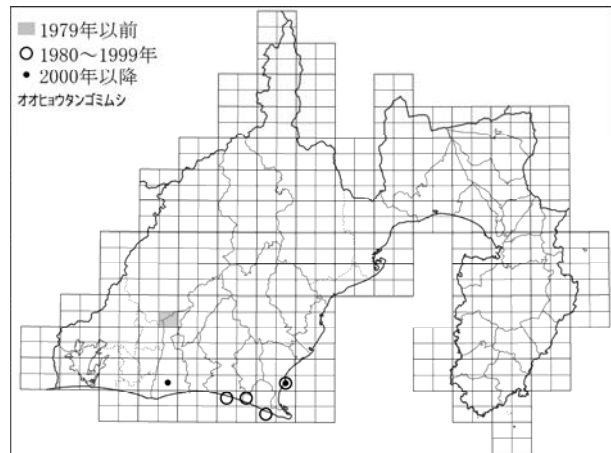
9. 標本

御前崎市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa

御前崎市産 1983年7月8日 石川 均採集



(多比良嘉晃)

コマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus acuminatus* Motschulsky, 1859

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

体長 2.0～2.5 mm。体はやや細い卵形。背面は網状印刻に覆われるがやや不明瞭で光沢は強い。頭・胸部は黄赤褐色、上翅は暗黄赤褐色。上翅はやや大きな点刻をやや密に装い、時に不明瞭な点刻列となる。腹面は黄赤褐色で印刻は弱く光沢が強い。触角、口枝、肢も黄赤褐色。

前胸腹板突起は三角形で側縁は縁どられ、後肢基節前縁の隆起線列を欠く。

2. 分布

国外では台湾、東南アジア、フィリッピン、インドからイランまで広く、国内では本州（福島県以南）、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では磐田市桶ヶ谷沼と浜松市南区松島町で記録があり、他に南伊豆町、浜松市西区大平台・篠原町・村櫛町での採集例がある（未発表）。

3. 生息環境

池沼や湿地、放棄水田など水生植物が豊富な止水域に生息する。

4. 生息状況

県内での記録は少なく、詳細な生息状況は不明である。現在のところ、西部と伊豆で確認されているが、近年、浜松市南区松島町では確認されていない。磐田市桶ヶ谷沼では2016年の採集例がある。

5. 減少の主要因と脅威

全国的には、開発による湿地の消失（12、13、15-1）、圃場整備による乾田化（15-2）、耕作放棄による遷移の進行（53）、水質汚濁（31）、農薬汚染（32）により減少傾向にある。

6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

7. 特記事項

近似種にマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus subtilis* Sharp, 1882 やサメハダマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus stridulus* Biström, 1997 があるが、本種は後肢基節前縁の隆起線列を欠く点で区別できる。

8. 主な文献

北野 忠・石田和男（2000）遠州地方で採集された水生鞘翅目．遠州の自然，（23）： 9-14

北野 忠・記野直人・長谷川 洋・北山 昭（2000）静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録-本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心として-．甲虫ニュース，（129）： 7-9

森 正人・北山 昭（2007）改訂版図説日本のゲンゴロウ（第2刷）．文一総合出版，東京，231 pp.

杉山恵一 編（1990）桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-．財団法人日本野生生物研究センター，東京，334 pp.

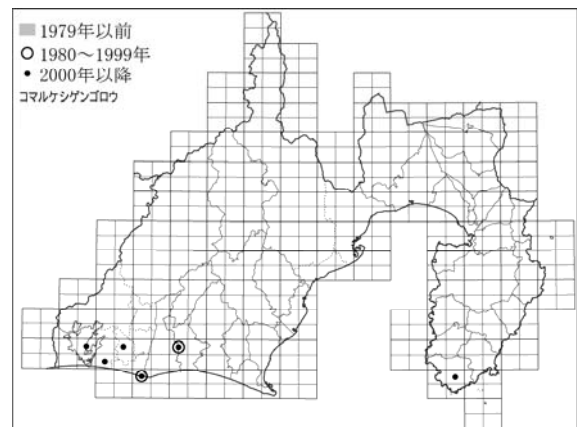
9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 T.Sakai

南伊豆町産 2008年9月2日 酒井孝明採集



（多比良嘉晃・石川 均）